

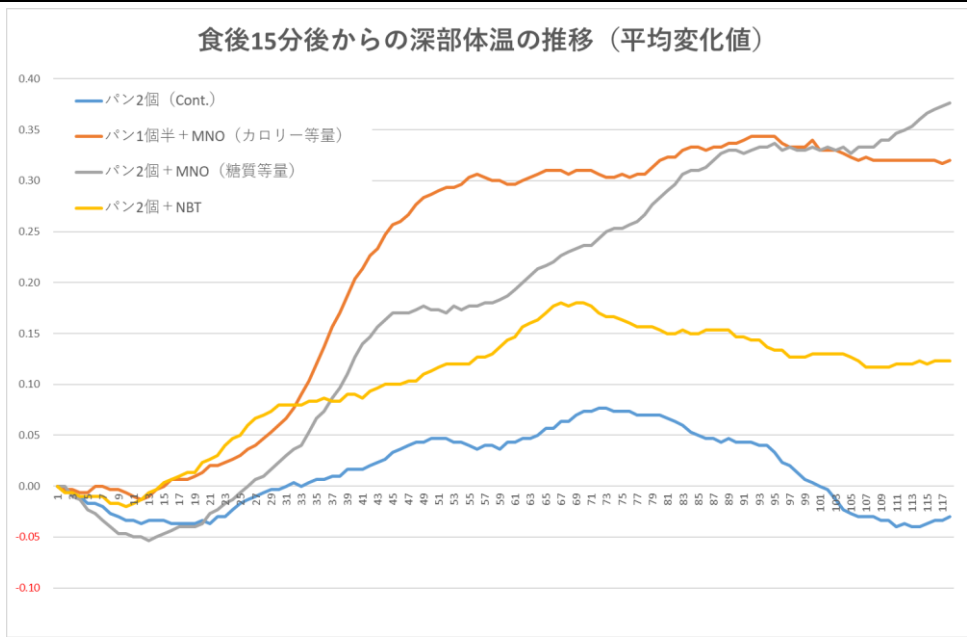
## 2023年度 独創的研究助成費 実績報告書

2024年 3月 13日

報告者	学科名	栄養学科	職名	准教授	氏名	池口 主弥
研究課題	人々が健康食品に興味を持ち、それを選択し、購入・摂取し、継続的に利用することに関する消費者心理・行動の解明					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	池口主弥	栄養学科・准教授	機能性食品	代表者	
	分担者					
研究実績の概要	<p>人々が健康食品に興味を持ち、それを選択し、購入・摂取し、継続的に利用することに関する消費者心理・行動の解明のために、まず生体としてのヒトが食品からの刺激をどのように受容し、知覚し、また生体として反応するののかの知見を得ることとした。ヒトが意識的・習慣的に好んで摂取するものが、本当に生体にとって生理学的に良好な反応を示すものなのか、そうでないものなのかを解明することは、長期的な継続意向の予測・解明にも繋がるのではないかと考えたからである。</p> <p>生体反応を測定する機器（生体デバイス）としては、睡眠時間・質や活動量を測定できる腕時計型ウェアラブル端末 Fitbit (Google, USA)、胸部に装着することでアルゴリズムによって深部体温を計測できる測定器 CORE (CALERA®, greenTEG®, Switzerland)、指先からの微細な末梢血から血糖値を測定できるグルテストアクア(三和化学研究所)を用いた。また食後の眠気、疲労感、満腹感は Visual Analogue Scale 法 (VAS 法) を用いて測定した。朝食時にロールパン2個 (290kcal) を摂取した際の体温変化、血糖値変化、VAS の変化を測定した。また同時に2種類の機能性成分を摂取した際のそれらの変化を測定した。結果、パンのみでは食後の深部体温はほとんど上昇しなかったのに対し、機能性成分を摂取させた場合は顕著な体温上昇が認められた(図)。一方血糖値はパンのみの場合は摂取直後から高く推移したのに対し、機能性成分はいずれも食後血糖値の上昇を抑制する傾向にあった。あわせて実施した VAS によって、パンのみの場合に発生した眠気、疲労感、空腹感は機能性成分によって抑制される傾向にあった。午前中の体温の上昇は目覚め、活動量の増加、計算効率の向上にもつながると言われている。朝食の欠食は大学生で最も高く、摂取したとしてもパンのみの食事で済ませる学生も多くいるが、パンのみでは血糖値の上昇は見られるものの、深部体温は低く抑えられたままで、眠気、疲労感などを誘発し、日中の活動が制限される可能性がある。本研究で効果が認められた機能性成分を朝食に加えることで、朝の目覚めのサポート、日中の活動性の向上に資することが期待できる。</p> <p>今後はさらに対象者数を増やして統計学的な解析を行うとともに、消費者の機能性食品（健康食品）の選択の場において、どのような生体反応が生じているのか、それを検出することはできるのか、またその反応がその後の継続性などに及ぼす影響もあわせて検討していきたい。加えて、健康食品の利用が消費者の QOL の向上につながっているのか、また消費者の QOL の向上につながるためにはどのような前提条件が必要なのか (etc. 教育歴、健康食品に対する知識) を調査研究等を通じて明らかにしていく。</p>					

※ 次ページに続く

研究実績  
の概要



成果資料目録